

# 現代日本社会と向きあう西洋史講義 (その2)

## —— 世間の変容とこの国の危機 ——

岩崎好成

An Attempt to Lecture on European History Shedding Light  
on the Characteristics of Modern Japanese Society (Part 2)

Takashige IWASAKI

(Received October 26, 2000)

### はじめに

この国の企業は、贈賄罪等何らかの疑惑の目を向けられた時、それを否定しながら次のような科白を吐くことがしばしばある。「世間をお騒がせして申し訳ありません」。なぜ当該企業は、一方で無実を主張しつつ他方で詫びることができるのだろうか、あるいは、なぜ詫びねばならないのか。科白と言え、昨今、「人目に余る振る舞いが増えた」と嘆く大人は少なくない。それが事実とすれば、そのような事態が招来した理由は何か。若者を中心に我々の行動は、もはや世間の眼差しによる拘束から自由になったのだろうか。同じく昨今、日本の学校システムが危機的状況に陥ったことは周知のところだ。では「学校危機」はなぜ生じたのか。「豊かな社会」の下、これまで強固だった学校世間の共同体的あり様に齟齬を来すようになったのか。そして、その学校で推し進められ(ようと)している道德教育の強化は、果たして事態打開の展望を開くもの足りうるのだろうか。

本稿では、前稿に引き続き、筆者が担当する必修講義「西洋史」の終盤部分の内容を報告する。講義タイトルは、「ヨーロッパ中世におけるキリスト教の浸透のあり様・意味を比較史的に考える、我々の現在を理解するために」というものだ。この比較宗教社会史的講義の終盤部分では、第一に、キリスト教的伝統のない日本の近現代人における〈世間〉の重み、あるいは〈個人〉〈近代市民〉社会形成の弱さ、第二に、昨今の世間の変容ぶりとその原因および問題性について検討した。第一の論点については、前稿(=『山口大学教育学部研究論叢』第50巻所収)でその多くを扱った。本稿は、その残りとして、サブタイトルが示すように、第二の論点を扱う。

筆者の問題関心については、「〈世間〉知らずの〈社会〉科教師でいいのか」とのサブタイトルを付した前稿で、以下のように記しておいた。無論、本稿もこれを共有する。

「筆者は、社会とは似て非なるものである世間の眼差しが、我々の日常の立ち居振る舞いを多分に決定しており、道德もまた世間の縛りから自由ではないと考えている。とすれば、この世間がどういう性質をおびているか、ということが問題となる。その『眼差し』『縛り』の意味内容が明らかにされなければならない。と同時に、重要なことは、我々が社会の中の個人としてではなく、まずこの世間の一員として生きている、

ということを十分認識することだ。そのことによって初めて我々は、自らをとりまく環境を客観視しうることになり、上滑りすることなしに、形式化することなしに社会を語ることが可能となろう。「学校（教育）は社会（の中の個人）について大いに語る。だが、学校もまた世間のひとつだ。教師も子どももそれぞれの世間をもちながらそこに生きている。これを十分踏まえるか否かで、学校改革論議も社会科教育論議も道徳教育論議も質的違いを招来するのではなかろうか。」

なお、終盤部分のみならずそれ以前を含めた講義全体を貫く筆者の意図、とくに本講義の歴史教育上、（社会科）教員養成上の意義づけ等に関する詳論は、紙幅の関係で、別稿で扱うことにしたい。

ちなみに、前稿の内容構成を明らかにしておけば、第1章「個人という概念の希薄な国」は、次の二節より成った。1. 非キリスト教国の〈個人〉の鍛えられ方の弱さ、2. 我々の日常生活における〈個人〉。第2章「『世間』とは何か」は、次の五節より成った。1. 「社会」と「世間」、2. 「世間」優位の日常生活、3. 善悪についての世間的コンセンサスとしての道徳、4. 世間の共同体的あり様、5. 「学校の先生は世間知らず」か？。

### 3. 謝罪と世間——「世間」とは何か（その2）

さて、前稿で最後に問うたのは、「PTA 役員や何かの幹事を決める時、なぜ我々は、話し合いよりくじ引きによる決定を好むのか」ということだった。これに対し、世間論的立場からの回答を試みたが、その際、そもそも、なぜ、話し合いの代替手段がくじ引きなのか、との新たな問いが残されることになった。これに答えるには、歴史を遡らなければならない。我々は、「世間をお騒がせしたことをお詫び致します」との科白をよく聞かすが、実は、この科白とくじ引きの選択とは、この国の歴史において浅からぬ因縁をもった事柄だ。ここから、議論を再開することにしよう。

#### （1）「神判」的世界が存続する国

話し合いの代替手段として、我々が他でもなくくじ引きを選択するのはなぜか。なぜ、我々は、くじ引きの結果を当然のものとして受け入れられるのか。阿部謹也は、（本稿で扱っているコマ以前の講義の中で示したように）「わが国では十九世紀まで残存し、とくに明確な絶縁宣言がなされていない神判の問題との関連」上に、これを説明している。<sup>(1)</sup>

神判とは、人智では判断しがたい時、自然力（＝火とか水）、超自然的存在（＝精霊やカミガミ）に判断をゆだねる裁判形態のことだ。古来よりヨーロッパでも日本でもおこなわれ、鉄火裁判や湯裁がポピュラーなものとして挙げられる。前者は、灼熱した鉄を手にとることができるか、その上を歩くことができるか、あるいは火傷の状態はどうか等によって、当事者の証言の当否を判定するものだ。後者は、鉄が熱湯に替わる。実はくじ引き・くじ取りもこの神判のひとつで、たとえば、小枝を二本用意し、一本に印を付けた上で子どもに選ばせた。その結果は、何らかのカミガミの意思の表われとして受け止められた。ヨーロッパでは、13世紀初頭にカトリック教会がこの神判との関わりを司祭に禁じたことによって、以後、神判は衰退してしまった。この国ではそうではない。鉄火裁判（＝火起請）は17世紀においても会津での境界をめぐる争論でおこなわれているし、広義の神判としての落書起請・入札（＝無記名の投票によって犯罪者を決定する。票が入ること自体、神意とされた）は幕末まで存続している。くじ引きは、今でもポピュラーだ。我々がくじ

引きの結果を公正なものとして受け入れられるのは、深層に神判感覚が残っているからに他ならない。そこで注目されるのが、参籠起請という神判だ。これを阿部は、次のように解説している。(2)

「鎌倉幕府法によれば、互いに争っている当事者の間で決着がつかないときには、それぞれに偽りの申し立てをしないことを宣誓した起請文を書かせて、十四日間、神社に参籠させ、その期間中に次のいずれかの失（不都合）が一方に起こったばあい、当人の起請が虚偽とされた。その失とは、文暦二年(1235)の式目追加・・・における起請文失条の篇目をみると、鼻血を出すこと、起請文を書いたあと病気になること、烏などに尿をかけられること、鼠に衣装をかじられること、身体から下血すること、近親に死者が出ること、父子に罪人が出ること、飲食のさいに咽ぶこと、乗用の馬が倒れることなど全体で九条あげられている。・・・ここで注目すべきことは、本人の行為の道徳的評価は全くなく、自然界の中での本人の位置が問われている点である。本人の身体の異常が本人の失の表れとされているだけでなく、本人の親族に死者が出ることも本人の失を表わすものと考えられている点である。」

さて、今なお、くじ引きに親しいことに示されるように、神判的世界との絶縁はこの国では十分ではない。とすれば、今でも、親族等本人の周囲の異常を含めた失が問われるということがあるのではなかろうか。我々が身内に不幸があった時、年賀状を控えるのは、失としての「近親に死者が出ること」が暗黙裡に問われているからではないか。では、「父子に罪人が出ること」はどうか。これを失として咎める感覚が今なおあるとするならば、それと世間の排他的かつ共同体的な性質が結びついた場合、どうなるか。

そこでは、個人の罪や責任が個人的問題の域を越えて、身内さらには同じ世間につらなる人々と不可分の関係の中に置かれることになる。不祥事（を起こした人）との何らかの関わりをその者の失として咎め、世間に対して責任をとらせることになるのだ。これも世間のあり様の特質のひとつだと言えるだろう。

## （2）「世間をお騒がせしたことをお詫びします」の意味

具体的には、たとえば、何らかの不祥事に関わった時に企業の代表者が吐く「世間をお騒がせして申し訳ありません」との科白だ。企業の一員が犯した罪は、それが個人的犯罪であっても、その者がつらなる世間である企業全体の罪として捉えられる。そこで企業は、その企業に更につらなる世間の皆様に詫びを入れねばならない、という構図だ。そして、この構図が拡大すると、かなり特異な事態がそこに生ずることになる。以下に示すように、何らかの不祥事との関わりが問題になった時、しばしば企業は、関わり自体を強く否定しながら、にもかかわらず世間に詫びを入れてしまうのだ。

94年3月、副社長が贈賄罪で起訴されたゼネコンの鹿島は、「世間をお騒がせしたことを心からお詫びします」と述べた後、しかし、次のように続けた。「これから公判の推移を見守りますが、今後はこのような疑いを受けることのないよう・・・」。(3) 98年9月、防衛庁の背任容疑事件で家宅搜索を受けたNECは、当初、「当社は本件と何等の関係もなく、なぜ当社に搜索が入ったのか理解に苦しんでおります」とコメントした。ところが幹部が相ついで起訴されると、お詫びの言葉が出てくる。その言い回しが興味深い。「繰り返しになりますが、本件に関し世間をお騒がせしたことにつきましては重ねてお詫び申し上げます」。(4)

これらの科白の意味するところは何か。「自分は無実であるが、世間をお騒がせして申し訳ありません」を、そのまま西欧の言語に翻訳することは不可能だ。欧米人なら、無実であるなら謝罪する必要はない、世間が納得するまで自己主張を続けよ、と言うだろう。では、鹿島やNECはただ単に開き直っているだけなのだろうか。身に覚えがある場合はそういうことになる。だが、もし両社が自らの潔白を信じている場合は、コメントの如き言い回しになる他はないのだ。なぜなら、この国では、事実関係に決着がつく以前に、疑いをもたれただけで、世間に詫びることが要請されるからだ。潔白を主張するNECとしては、せめて、「お騒がせしたことにつきましては」と限定を付して詫びるしかない。

ダイエーホークスの事例はもっと強烈だ。99年、スパイ疑惑（＝球場での相手バッテリーのサイン盗み）問題に際し、同球団は、疑惑を否定しながらも幹部を処分するに至る。「疑念を抱かれ、世間を騒がせたことに対して取締役会で審議し、社長の辞任、代表の降格を承認いたしました」。(5) ここまでくると、欧米人は理解できないだけでなく、恐怖心すら抱くかもしれない。だが、世間の国・日本では、これが事件発覚以来、人々に待たれていた措置なのだ。これで一件落着となる。その証拠に、今では誰も事件を論じない。忘却の彼方にある。

あらためて問おう。なぜ、こうなるのか。なぜ、この国では、無実を主張する者が、にもかかわらず、自らに処罰を下すことができるのか。なぜ、潔白を主張しながら詫びることが可能なのか。要は、謝罪が向けられる方向にある。誰も社会に詫びてなどいないのだ。自分の世間に向けてだからこそ詫びることができるし、詫びねばならない。阿部は言う。

「世間の自分と関わりのある人々に対して、自分の直接の行為ではないが、自分と深い関わりのあるものの中でこういう障害が起こり、それが自分の失であるから、自分の失によって世間が迷惑をこうむる可能性があることについて謝罪する。社会は何の関係もない。社会に謝罪しているわけじゃない。世間に対して謝罪しているに過ぎない」。(6)

類似の構図をタカ派「失言」閣僚の前言撤回・辞任の弁にうかがうことができる。曰く、「非常にタイトな日程の中で、国会が止まった責任を非常に強く受けとめ、責任の表れとして辞表を出した」、曰く、「私は・・・国外、国内にもきしみが生じているなら、私の発言を全部撤回してもいいと言っていた。私の発言が間違っているから撤回したのではない」。これらの弁を、評論家の加藤典洋は次のように分析する。(7)

「つまり、彼らは、先に開陳された『信念』が誤っていたため、その社会に対する政治家としての責任をとって辞任するのではないのです。それは発言問題が彼らの属する政党、派閥にもたらした迷惑に対する、その集団の構成員としての責任です」。

要するに、ここでも当事者が向いているのは自分が属する世間であって社会ではない。信念を貫いて罷免されるまで突っ張ることは殆どなく、皆、辞任する。これは事実上の信念放棄であり、社会的には恥知らずな行為だ。だが、世間の国・日本ではそれができる。なぜなら、世間優位の日常生活をおくっている日本人は皆、辞任の弁などタテマエで、ホンネは違うと受けとめてくれるはずだからだ。そして、時には、何らかの事件、たとえばいじめや体罰の被害者であっても、告発などすれば、「世間を騒がせた」として逆に糾弾されることもある国だ。タカ派政治家とて、適当なところで世間に詫びを入れねばならない。そうすれば、失言政治家（ならぬ汚職政治家であって）も、内にやさしい世間から「みそぎは済ませた」と認められ、捲土重来を期すことができるだろう。

### (3) 「世間に顔向けできない」のは誰か

「世間に顔向けできない」という言い回しがある。不祥事との何らかの関わりをその者の失として咎めるこの国では、世間に顔向けできないのは当事者だけではない。周囲の者も同様だ。

連帯責任による高校野球の対外試合禁止や出場辞退はその典型だ。メンバーの不祥事はチーム全体の失となる。当事者だけはずせ、にはなかなかならない。だが、元都立高校長の笠間達男が伝える以下の文章を読むと、この高野連の措置がきわめて非現実的で、何ら教育的でないことは明白だ。(8)

「都立N高校の野球部の生徒がオートバイ事故を起こした。六月中旬のことである。学校はきびしい指導を加え、生徒もどうやら立ち直れそうに見えた。『その直後に高野連の予選出場停止の処分がでたのです。彼はチームの仲間はどうしていいかわからないのです。残酷ですね』と生活指導担当者が悩んでいた。オフシーズンの高校野球部の話題のほとんどが非行に関する問題である。推定10万人の野球部員が非行ゼロというのは非現実的な理想である。同年齢層の非行出現率から考えれば数百件の非行があっても不思議ではない。」

このように、高野連の教育的措置なるものは、不祥事を起こした生徒を徹底的に追い詰めて顧みないものだが、こういう理不尽を平気でなすだけに、理事たちの構成する世間は、きわめて内にやさしい。その道徳も恣意的だ。このことをビートたけしが教えてくれる。

「高野連理事を務めていた光沢が例の明大替え玉受験事件で逮捕されたとき、他の理事は連帯責任をとったかつての。万引きで出場停止にするんなら、理事は総辞職して責任をとらなきゃ、おかしいよね。」(9)

この種の異常さがまかり通るのも、この国では世間優位の日常生活がおくられているからだだろう。その一端を支えるのが学校教育だ。連帯責任を振り回すのは高野連の専売特許ではない。

「小学校低学年の頃、クラスで味噌汁を作るということになった。当然クラスはいくつかの班に分かれた。先生は『一番机の上を片づけるのが遅かった班には洗いをものやってもらおう』といった。結局、ぼくが机の上の筆箱をしまい忘れてしまったので、僕の班の全員が洗いをものをするということになってしまった。その時の僕は他の班員に対する悪いことをしたなという気持ちと、先生に対しての恨みの気持ちでいっぱいだった。」(10)

当事者のみならず周囲の者も「世間に顔向けできない」。もう一例を挙げれば、犯罪者が成人に達していても親兄弟は責任をとらされる、というのがそれだ。確実にその対象となるのは芸能人だ。ビートたけしにもう一度語ってもらおう。(11)

「・・・芸能人の二世がバタバタ麻薬事件起こしちゃってさ。ホントに二世には困ったヤツが多いよな。でもオイラに言わせりゃ、松尾和子さんにしたって三ツ矢歌子さんにしたって、なんでああやって、みんなの前で泣いて謝んなきゃ、いけないのかね。芸能人だからって言うけど、息子は二十八歳とか二十四歳とか、もう立派な大人だぜ。」これがエスカレートすると、次のような新聞記事となる。(12)

「宮崎県北方町の佐藤嘉紘町長(56)が18日、会社員の長男(26)が逮捕されたことへの責任を取って自らの7月の給与を10%減額する条例を、開会中の町議会に提案、全会一致で可決された。・・・示談が成立し、長男は即日釈放されたが、事件を知った複

数の議員から町長の責任を追及する声が上がっていた。佐藤町長は提案理由の説明で『家族のことで皆さんに迷惑をかけ申し訳なく思っており、責任を取りたい』と陳謝した。』

#### (4) 世間の代表気取りのメディア

繰り返しになるが、この種の異常さがまかり通るのも、この国では世間優位の日常生活がおくられているからだ。そして、その一端を支え、あるいはむしろ助長するものとしてマスコミの存在を見逃すことはできない。

たとえば朝日新聞や毎日新聞は人権擁護の論陣を張ることが多いが、両社が高野連の連帯責任の措置を正面から批判し、甲子園大会の後援を撤回するという話は聞こえてこない。むしろ目につくのは、世間の代表気取りで失を咎めるマスコミの姿の方だろう。この国は、無罪・微罪の一般人は、名前を出されれば致命的な打撃を被ることになる世間の国だ。累は身内に及び、退社に追い込まれたり縁談がこわれることもまれではない。このことをジャーナリズムが知らないはずはないし、十分踏まえて然るべきことだろう。だが紙面を見る限り、その期待はしばしば裏切られる。そこには、報道する必要があるとは思えない事件があるいは匿名にしても何ら価値は減じないと思われる事件が、実名入りで並べられている。余罪まで憶測した記事が掲載される一方、容疑が晴れたことは殆ど伝えられない。新聞報道によって初めて「世間を騒がせた」ことになる例も少なくない。これは何も政治家の「失言」に限らない。何らか（とくにイデオロギー上）の物議を醸し出すために書かれたとしか思えないような記事は、しばしば目にするところだ。その結果、関係者が被るだろう迷惑への想像力は記者にはない。余所の世間のことは関係ないからだ。(13)

対象を扇動的週刊誌やテレビのワイドショーを含めたメディア一般にまで広げると、事態はかなり深刻だ。そこでは、妻の犯罪なのに夫の名前を出し、子どもの犯罪だとその親を罵倒することに終始するのが常だ。彼らは、世間の国・日本で持つメディアの権力に無自覚どころか、それを積極的に行使してはばからない。記者経験のある作家の辺見庸は、「少年Aとメディア」と題する対談の中で次のように言う。(14)

「私が少年の写真を載せたことに反対なのは、少年法があるからではない。プレス・トライアル（報道裁判）的な、傲慢なやり口が嫌なのです。一枚の写真だけで当事者以外に暴力や社会的リンチが及んだりすることが現実にあります。罪を犯した人間と関係者にはそれなりの報復があるべきだという応報思想が、きわめて情緒的に台頭してきていることには慄然とせざるを得ない。プレスに刑事事件の裁定権や科罰権があると考えるのは、クレージーな錯覚ですよ。」

要するに、そこにあるのは、自らに「科罰権があると考える」（一部）マスコミが、かつての公開刑にあたるもの（＝写真掲載や身元公開）を紙誌面上で展開し、失を咎める世間に生きる広汎な人々が、ただカタルシスを得たいがために、これを歓迎する、（それによって当該マスコミは利益を得る）という構図だ。それが証拠に、公開刑の機能や応報思想が充足されてスカッとした人々の殆どは、再発防止策等を含めた事件の分析などにはもはや関心を示さず、事件は忘却の彼方となる。

付言すれば、こういう報道姿勢や受け止め方はどこの国でも大差ない、と見るのは短絡的だ。先に、この国のワイドショー等は子どもの犯罪だとその親を罵倒するのに終始する、と述べたが、米国も同様か。99年4月に合州国コロラド州リトルトンのコロンバイン高校

で銃乱射事件が起きた。米国でも毎日のようにテレビ討論番組があったが、これを見ているうちに、社会学者の大澤真幸は、「報道の態度のようなものの内に大きな差異があるのを感じ始めた」と言う。<sup>(15)</sup>

「犯人はあれだけのことをやったわけですから、犯人に関して弁護できることはほとんどありませんね。しかし、それでも、犯人やその家族を、パーソナルに攻撃するような感情的な批判はまったくないんです。討論の最大の主題のひとつは、家族の責任ということでしたが、しかし犯人の家族そのものを批判する論者は一人もいないんです。」

この違いが生ずるのはなぜか。大澤は、「アメリカの宗教的伝統のポジな面が出ている」と見る。本稿は、失を身内にまで問う世間の国であるか否か、からこれを考えるものだが、元々このような把握を可能にしたのは、比較宗教社会史的視点だ。だから、キリスト教信仰の受容がもたらした意味を考えるという点では同じことになる。ただ大澤の場合は、より具体的なイエスの教えからこれを考察する。興味深いので引用しておこう。<sup>(16)</sup>

「どうして、批判が、容赦のない感情的な攻撃にまで転化しないかということ、相手にどんなに分がないように見える時でも、自分が100パーセントの正義の側に立つことはできないからです。言いかえれば、批判に際して、批判の対象となっている相手の罪や過ちから自分自身も完全には自由ではありえない者として、その意味で、最小限、相手を肯定し受容することを前提として、発言がなされているわけです。『ヨハネによる福音書』(八章)に、こんな逸話がありますね。人々が姦淫の罪を犯した女をイエスの前に連れてきた時、絶対に罪がないものだけがこの女に石を投げてよい、とイエスが言ったところ、誰一人として石を投げるができなかった、という逸話が。この構成と同じです。」

以上、第2・3章では、我々の行動や人間関係を強く規定する「世間」の態様について、とくにそのネガティブな側面を前面化しつつ論じてみた。本章を閉じるにあたり、最後に阿部の主張に耳を傾けておくことにしよう。氏は次のように言う。<sup>(17)</sup>——我々は「頭で社会の事を考えながら、現実の行動様式は世間の行動様式に準拠し」ている。これは分裂か。否、我々は「実際には分裂していない。どうしてかということ和社会を語るときは、責任なく語っているから」。語るだけで、我々は実際には世間とたたかわないからだ。「人権とか民主主義といった理念が、日常生活の個人のレベルにおいては、何の力も持っていない点に注目」すべきだろう。我々は「ヨーロッパ的な意識を明治以降持ち続けて」おり、「そのこと自体が悪いということではな」い。だが「そのことと足元とのギャップは知っておく必要がある」。我々の下では、「戦前・戦後を通じて、ヨーロッパ風の人格概念や人権の思想を日本人の」世間中心的「人間関係の中で具体的にどのようにして生かすべきか、という問題については十分に考察されていないのである」。

#### 4. 変容する世間

ところで、97年6月6日付けの朝日新聞天声人語は、昼前の山手線の車内風景を次のように語る。

「私の斜め前の席に座っている若い女性が、コンビニの袋から弁当と缶入りのお茶を取り出し、悠々と食べ始めた。あたかも自宅の茶の間にいるがごとし。車内で化粧す

る女性は、珍しくはない。若い層に多いような気がする。なかには、ひざの化粧バックを開けて、一から本格的に取り組む人もいる。他人の目など、まったく気にしていない。下校時の電車で、身をくねらせて、制服の上着を脱ぎ替える女子高校生を見た同僚もいる。」「傍若無人な携帯電話族が増えているのも事実。・・・この間まで、日本には以下のことばが存在したように思う。＜人目がうるさい。人目を忍ぶ。人目を避ける。人目をばかす。人目を盗む・・・＞」

前稿で述べたように、我々が気にする「人目」とは、あくまで自分の世間につらなる人の目だ。単なる他人の目など、元々我々は気にしてこなかった。だが、天声人語が伝える事例は以前にはなかった振る舞いの数々だ。それも「若い層に多いような気がする」と言う。すると今日の若者は、世間の縛りからかなり自由になってきたということか。自由だとすれば、それは、独立した個人からなる社会の下に生きていることを意味するのか。天声人語が伝える内容から見て、善悪についての世間的コンセンサスとしての道徳の行方は如何？。総じて、近年、我々の世間に何が生じているのか。これを本章では考えてみたい。

### (1) 小さく無関連になった世間

これまでに述べてきた世間論は、現代日本の若者にとってなお有効か。これを確かめるべく、受講生35人に「君たち若者はもはや世間から自由か」と問うてみた。結果は8人がイエス、26人がノー、1人が保留というものだった。つまり、このクラスで見える限り、若者として、今なお世間の縛りから決して自由ではない。とすれば、問われるべきは、「にもかかわらず、他人の目など全く気にしない行為が増えたのはなぜか」ということだ。

これを問①とすれば、問②は「困っている人を放っておく人間が増えたのはなぜか」だ。97年1月3日付けの読売新聞に次のような記事がある。ガーディアン・エンジェルス東京支部設立の経緯に関し、若き支部長が語る。

「一昨年五月ごろ、都心で妙な光景を目にした。郵便配達のアートバイが滑って転倒した。大雨の日で、目の前のファストフード店では、軒下に三十人くらいの若者が雨宿りしていた。ところが郵便物が散乱し、雨にぬれているのをみんな見ているだけ。助け起こそうとしないのだ。『びしょぬれになってアートバイを起こすのを手伝ったけど、とても寂しい気持ちでした』。新宿駅のホームでけいれんを起こして倒れている女性を見たときも同じ気持ちを味わった。やじ馬はいるが助けようという人がいない。携帯電話をかけていた若者も、救急車を呼ぶでなし、『今、だれかが倒れてるよ』と知り合いに面白がって話すだけ。『困っている人を放っておく、すぐ近くで起きているのに関心がない——日本人がプライドを失ってきているからではないだろうか』。同支部設立に拍車がかかった。」

確かに、世間本来のあり様からすれば、余所の世間の人のことなど関係ない。だが、上の事例の場合、以前なら少なからぬ人々が手を貸しただろう、と推測するのは大いに可能だ。大都会における極端な例なのかも知れないが、急病人でさえ無視する排他的世間の中に、我々は住むようになったのだろうか。

多分そういうことなのだろう。近年、我々の世間は変容してきているのだ。受講生多数が答えた如く、世間は存続している。だが、今や、各人の世間は縮減し、かつ、相互に無関連になってきているのではないか。人目は相変わらず気にするが、その範囲はかなり狭くなり、(属する所は違っても) 同じような世間を生きている、との感覚も薄れてきたの



ではないか。近年とみに、より若い人々においては特に。

元々、この国は、仲間以外はみな風景、という世間の国だ。その「仲間」の範囲が狭まれば、人を人とも思わない「風景」地帯は当然拡大しよう。また、元々この国の道徳とは、善悪についての世間的コンセンサスの意だ。だから集団の一致が得られれば、すなわち、みんなで渡るならば、赤信号も怖くないものとなる。この「みんな」が小さくなれば、世間体が悪いから、世間が許さないから××しない、との縛りの範囲も狭くなる。小さな「みんな」が許せば、問①でいう傍若無人な行為も可能になるのだ。いわゆる公衆道徳が弛緩するのも当然だろう。社会学者の宮台真司が次のように事態を適切に語っている。(18)

「ある調査によると女子高生の四割以上がルーズソックスを履いているが、いろいろ聞いてみると、ホントーはこんなの履きたくないという子が少なくない。でも友達仲間の中で自分だけウキたくはないから、みんなに合わせて履いている。つまり『郷に入りては郷に従え』の『郷』に相当する仲間集団が『小さく』て『流動的』なものになったために、タマタマ一緒にいるだけだという『偶発性』をシャカリキになって覆い隠さなければならなくなり、仲間集団内の『同調圧力』が以前にも増して高まってしまったのだ。その結果、ただでさえ『旅の恥はかき捨て』的な国民性なのに、仲間の内部に絶えず注意が集中しがちになってそれが強調され、今や『仲間以外はみな風景』とでもいえるような感受性になっている。・・・仲間さえ大切にしていれば、外の世界はどうでもいい。人の目が一切気にならない『旅の恥はかき捨て』モード。だから電車の中でもカップルはベタベタしているし、コンビニの前ではみんなで地べた座りしてカップ麺をすすっている。教室の中の『関係ないヤツラ』に売春していることを知られたって平気だ。・・・でもオトナにとっては電車やコンビニや教室は、まだまだ人目を気にしてちゃんとするべき空間。『今の若者はモラルがない』とオトナたちが叫んでしまうのも、この辺に理由があるのだ。」

問②でいう、冷淡で排他的な人間が増えてきたのも世間の変容がなせる業だろう。かつての我々は、各世間の接続性が実際大いに保たれる世界に住んでいたから、それぞれ別個の世間に属しつつも、他方で、お互い同じような世間を生きている、という感覚を共有することができた。たとえば次のような言い回しは、そうした感覚上のものだ。情けは人の為ならず。困った時はお互い様。袖振り合うも多生の縁。同じ日本人ではないか。・・・「渡る世間に鬼はなし」との言い回しも各世間は連関している、重なり合っているとの感覚上のものだろう。但し、この科白を実感をこめて吐けるのは、どこかの世間に受け入れられた場合に限るのだが。これらの言わば「大きな世間」意識があればこそ、赤信号では渡ってはいけない、という価値観・ルールを世間で共有しえ、多くの人々が、他人のために一肌脱ぐことができたのだ。

だが、近年は、世間が無関連になり、価値の合意が曖昧になった。「情けは人の為ならず」の語義解釈の逆転がこれを象徴しよう。今では、情けはかけてはいけないものなのだ。これが高じると、次のように「情け」の意味も不明となる。「お年寄りに席を譲らないで寝たふりをするのは、譲られた相手が恐縮するだろうと思いやる自分の優しさだ」。(19) こういう意味不明のところ、人は他人に情けなどかけられない。ヘタをすれば、なじられたり、引っ込みがつかなくなるおそれがあるからだ。情けを他人にかければ、巡り巡って自分の果報になる、などとは信じられない程に世間は無関連になったということだろう。

では、なぜ、世間は変わってきたのだろうか。なぜ、小さく無関連になったのか。次節

では、この問題を、宮台の「成熟社会」論に依拠しながら解説してみよう。(20)

## (2) なぜ、世間に変容したのか

世間はなぜ変容したのか。それは、成熟社会・成熟した近代・豊かな社会・高度消費社会、の到来などと形容される程に、1970年代を境にこの国が変貌したためだ。「物の時代から心の時代へ」とのスローガンが象徴するように、日本経済は70年代には高度成長期を終え、以後いわゆる安定成長の時代へと移行した。この移行過程で日本社会も大きく変貌し、その結果、「成熟社会」にふさわしい世間のあり様を形成した。どういうことか。

たとえば、まず、世間を成り立たせていた基盤のひとつである地域＝近隣の共同性が喪失した。1950年代からの郊外団地化(＝職住分離化)は、大量の人々を生まれ育った地域から離脱させ、残された人々・地域の世間を縮減させた。他方で、移り住んだ団地においては、新しい地域的世間は形成されなかった。なぜなら、知っている人だから仲よくできる、という世間の共同体的あり様に慣れ親しんできた我々には社交の能力が乏しく、そこでは、見ず知らずの人間が増えるばかりになったからだ。その結果、人目を気にしないですむ場が地域内外に拡がることとなった。団地化の進展は、かつて「親はなくとも子は育つ」という言葉を支えた地域共同体の濃密さを伴わず、近所の子ども同士が遊び友達とは限らない状況も作り出した。ハナから「教室はみんな仲間」などと教師も見なせない状況が、今では普通となったのだ。

「成熟社会」「豊かな社会」になるにつれて、共同性の核である家族すらが、「会社人間」の父親不在や個室化・個人電話化・個人テレビ化の進展等でバラバラになっていった。86年には3万軒に達したと言われるコンビニの急増に示されるように、個食化も進んだ。こういう下では、家族のメンバー個々の世間も重ならない。父親の説教も、かつてのような「近所のオバサンにも学校の先生にも同じことを言われた」というような地域的世間の支えを失ったから無効気味となっていった。唯一、親・地域・学校が同質性をもって子どもに迫ったのが、学校的価値観の押しつけだった。親も地域の人も、「成績のいい子悪い子」でしか見てくれない。「我慢して勉強していい学校に進め、そうすれば、いい会社に入れていい人生をおくれる」としか言わない。親も地域も学校に適応していれば安心し、「学校での評価はおかしい、どうでもいいぞ」とは誰も言わない。これも1970年代後半に始まる現象だ。塾通いが急増するのもこの頃からだ。ここから、子どもの、親を含めた地域的世間に対する否定感情が増加することになった。

他方で、「成熟社会」「豊かな社会」とは、モノや情報が溢れる社会だ。自ずとそこでは価値観も多様化し、同じものを共有する人間の輪、友人・知人の輪を狭めることになる。各人の世間は小さくならざるをえない。また「成熟社会」では物質的欠乏は満たされ、と同時に、資源・環境の限界によって経済成長の限界も露わになるから、かつて共有されていた夢・動機づけが無効となった。すなわち、もはや大きな成功も輝かしい未来もないから、豊かさの上昇や立身出世は共通目標とはなりえない。「今を犠牲にして頑張れば、将来豊かになれる」「真面目にコツコツやれば報われる」といった価値観も共有されない。現実がそれを裏切るからだ。学校的価値観を押しつけられてきた子どもも、91年のバブル崩壊後ともなれば、「いい学校・いい会社・いい人生」のメッセージを素直に受けとることはできないだろう。

少しデータを示しておこう。財団法人「日本青少年研究所」が98年末から99年2月にか

けておこなった中・高生の意識調査の結果は、かつての価値観や「輝かしき未来」像がもはや若い世代には共有されていない様を明瞭に物語っている。以下は、調査結果を伝える5月16日付け朝日新聞の記事だ。

『21世紀は人類にとって希望のある社会になるか』という設問では、『そう思わない』が61%で、『そう思う』の39%を大きく上回った。同じ調査は米国、中国、韓国の三カ国の中高生に対しても実施されたが、米、韓では6割強、中国では9割強が『そう思う』と答えており、日本との差が際だっている。日本の中高生の否定的な見方は、他の設問でも続く。『国民生活は豊かにはならない』67%、『人間は今以上信頼しあえない』75%。『不正や腐敗』については、84%が『少なくなるとは思わない』と答えた。一方、意識を探る設問でも、『将来より今を楽しむことが大切』が67%、『努力ばかりではつまらない人生だ』が58%と、覇気のない答えが多い。」

ちなみに、本クラスの37人にも聞いてみた。結果は次の通りだ。①人類にとって21Cは希望のある社会になると思う者—62%23人、②国民生活は今より豊かにはならないと思う者—59%22人、③21Cの日本は今より秩序のある社会になると思う者—14%5人。①②からすると、受講生は上の中高生よりは幾らか楽観的なようだ。③は後述するように、社会道德の衰退如何の問題に関係することから聞いてみた。なお、③に対する日本の高校生の回答「そう思う」は20%だが、米国は32%、中国は72%、韓国は42%と、これは5月14日付けの毎日新聞の記事が伝えている。

ともあれ、かつての「輝かしき未来」像を前提にした価値観が共有できなくなったとすれば、今や、何が幸せ不幸せかは人それぞれとなる。ひたすら多様化するだけで共通項を欠いた価値観の下では、我々は相手に何を期待できるかわからなくなる。しかも我々には、相手に探りを入れるような社交技術はない。「隣りは何をやる人ぞ」と不透明さは増すばかりとなる。となれば当然、不透明な他者からの眼差しへの適応として、視線への無関心さ・鈍感さが防衛的に高められることになる。こうして世間は、無関連化の度を深めることになった。

以上を端的に指し示すのが、若い世代のコミュニケーションのあり様だ。モノや情報が溢れる「成熟社会」で生きていくには、どのような作法・能力が必要か。我々はモノや情報のすべてを引き受けることはできないから、自らに有益なものを自ら選択していかねばならない。だが、それは容易なことではなかろう。とくに、未だ自己形成を果たしていない若い世代にとっては、「自らに有益」と判断する基準自体が不確かだ。いきおい彼らの選択はマニュアル頼りか、身近な、たとえば友達依存のものとなる。でなければ、単純に快・不快にもとづいて「ノリ」のいいものをピックアップすることになる。諸々の選択がその程度のものであるとするならば、その結果について踏み込むことは、お互いを傷つけることにもなりかねない。へたに腹を割って話したりすると「ノリ」が壊れて、一緒にいる理由もなくなってしまふ。宮台は次のように言う。(21)

「若者たちは、お互いが・・・傷つかないように、前もって防波堤を作ってコミュニケーションするようになった。『ノリ』を壊さないように気づかう『やさしさ』に満ち満ちたコミュニケーションがそれだ。だが、その結果、『親密な人間には親密な話ができず、疎遠な人間であるほど親密な話ができる』という逆説も生まれた。・・・他方で、自己防衛のために『ノリ』を壊さないように注意深くなるほど・・・他者は視界から消える。『自分を守る』ために意識的に『他人に踏み込まない』コミュニケー

ションから、『他人を人間とも思わない』コミュニケーションへは、ほんの数歩である。他人は『ただの風景』となり、自分のした行為についてもどこか『他人ごと』になる」。

そして、「快・不快」原則にもとづく選択の蓄積は、不快なものはすべて雑音としてやりすぎず「ノイズ耐性」の能力を若者に備えさせる。だからこそ、たとえば学生は、講義中の私語や携帯電話鳴らしにお互い「寛容」なのではないか。目に映らない、耳に入らないのであれば、それらは「とくに構わない」行為となろう。

このような若い世代のコミュニケーションのあり様に関わって、日頃筆者が抱いていた疑問を受講生にぶつけてみた。問うたのは次のような事柄だ。——「演習で中間の報告のあとの質問タイム。ある人が質問。報告者の回答は要領をえないもの。ところが質問者は『わかりました』と言って、再質問しない。8～9割の人がそうだ。これはなぜ。なぜ質問を続けられないのか、なぜ、わからないのに『わかりました』と言うのか、教えて下さい。」

結果は次の通りだ。やはり、「やさしさ」重視のコミュニケーションを実践する者が多数だ。19人51%の回答は、「あまりツッコムとかわいそう。相手に恥をかかせることになる」、「言い合いになることを恐れる。穏便に終わらせたい」、「食い下がると雰囲気为重くなり、自分も浮くのがイヤ」、そして、「しつこい奴だと思われたくない。同じように自分もツッコマレたくない」。別に一人、「自分だけが時間を使って何回も質問するのは、皆の迷惑になる」というのもあった。この回答は、先に紹介した「席を譲らないで寝たふりをするのは、譲られた相手が恐縮するだろうと思いやる自分のやさしさだ」に近いものがある。旧来の、いわゆる「世間体を気にする」類の回答者は5人14%だ。「自分だけがわかってないのかも知れず、二度訊くのはバツが悪い」、「一度の回答でわかったふりをしておかないと、自分が恥をかくかも」。非常に冷めた回答も多かった。9人24%は、「質問すること自体が目的だから一回で十分」、「それほど真剣に質問していない、わかったような気になればOK」、「『わかりました』と言っておけば、それで終了することができる」。残り3人の回答は、『『わかりました』とは、あなたに訊いても無駄だということがわかった、の意味だ』そう。こういった「冷めた回答」をく小さく無関連になった世間>に単純に結びつけることは無理かもしれない。だが、少なくともそこに見られる感性は、彼らが「成熟社会」下に成長してきたことと無縁ではないように筆者には思える。

ちなみに、これらの回答内容を踏まえると、また、回答者のうちの十数人が教員志望であることを考えると、教員養成（あるいは大学教育）は、もはや演習（＝ゼミ）のあり様すら自明視することができない。今や演習は、その意味、演習に臨む際の姿勢、そこでの作法、コミュニケーションの取り方といった類を共有することから開始する必要がある。さもなくば、演習が盛り上がりがないだけでなく、質問し質問され討論することで学ぶ、ということも口々に知らない教員志望学生を放置することになる。恥をかくことを恐れ「ツッコミ」を回避するところに、そもコミュニケーションが形成されるのか疑問だが、仮に形成されたとしても、それは一方通行的なものでしかありえない。そのような学生が教師になり、同種のコミュニケーション下手の子どもを相手に授業をおこなう時、それは果たしてどのようなものになるのだろうか。

### （3）住みにくくなる日本

「成熟社会」になって、我々の世間は小さく無関連になった。このことは、この日本社

会にとって「決定的」と形容できる程の深刻な意味を有している。上述の、問題に満ちた「やさしさ」重視のコミュニケーションの登場は、事的一端を語るにすぎない。世間の変容は、一言で言えば、摩擦・軋轢を増加させて日本を確実に住みにくい国と化そう。どうということか。これを以下、三点から解説してみよう。

① 先に示したアンケートでは、「21Cの日本は今より秩序のある社会になると思う者」はきわめて少数だった。その折にも触れたが、道徳とはこの国においては、善悪についての世間的コンセンサスのことだ。いわゆる社会道徳は、広汎な世間に支えられてこそ日本社会の道徳として通用する。社会常識も同様だ。ところが、今や、各人の世間は小さくなり、相互に無関連になってきた。こうなると社会道徳はその支えを失い、衰退せざるをえない。各世間は、それぞれの内部でしか通用しない規準の道徳・常識を前面化し、それが出会った所では、摩擦・軋轢が生じることになる。世間の縮減と無関連化が加速すれば、衝突は至る所で日常化されよう。無論、「21Cの日本は今より秩序のある社会になる」ことはなく、現状維持すら覚束ないだろう。

深刻なのは、すでに90年代に、日常生活上の摩擦のレベルをはるかに超えた、他者抹殺を辞さないレベルの秩序破壊者が、この国に登場していることだ。「地下鉄サリン事件」を引き起こした集団を世間論的にとらえた場合、彼らの特徴の第一は、世間の変容という状況下、オウム真理教というカルト的極小世間への所属を選択したことだ。嵩じて彼らが出家するに至り、一般世間から完全に離脱してしまったことが第二の特徴となる。彼らの入信・出家は、この国の世間が変容し、種々の摩擦・軋轢が急増する、という事態の延長線上の行為と見なしていいのではないか。ちなみに、出世間的共同体の下では一般世間の道徳はまず通用しない。加えてそこに、絶対神に等しい存在のグルと排他的かつ戦闘的な独特の教義が結合した時、他者抹殺（＝ポア）は善行へと変貌したのだった。

このような極端な帰結を含みつつ、世間の縮減・無関連化は、我々の社会道徳・常識を衰退させ、我々の日常を摩擦・軋轢に満ちた住みづらいのものへと変貌させる。では、事態は悪化するだけなのだろうか。我々には、摩擦・軋轢を緩和するような手立ては備わっていないのか。

② 「備わっていない」と言う他はない。この国は圧倒的に世間優位の国だ。前稿で述べた如く、この国では、＜世間知らず＞は咎められても＜社会知らず＞は事実上不問にされてきた。知らない者同士が、異質であることを認め合った上で構成する、運営する、との＜社会＞概念は我々とは疎遠だ。欧米の歴史が示すように、異質な個人は放っておけば衝突してしまうがゆえに、それを避ける手立てとしての人権思想や民主主義の涵養を＜社会＞は必須としているが、世間の国では、この認識はきわめて薄い。見知らぬ人にさぐりを入れる社交の技術は、我々の不得手とするところだ。この淵源をスポーツ文化論の立場から中村敏雄が述べる。<sup>(22)</sup>

「スポーツは、健康と社交を求める心から生まれた。日照時間が短く、宗教や顔立ちの違う人々が隣同士で住むヨーロッパ社会では、絶対に必要なものだった。社交だからこそ、点を取りにくくするルールができる。それにひきかえ、比較的、同質な人々が住んできた日本では、そもそもスポーツが必要ではなかったのではないか」。

見知らぬ人と出会うがゆえに最低限のルールを共有すべきパブリック・スペースの観念も、

この国にはもとより存在しない。無論、近年は欧米でも、携帯電話の使用を典型例に、公共空間のモラルはかなり侵食されている。だが、「かなり侵食されている」とは、「もとより存在しない」、あるいは、ゼロになった、と同義ではない。次のような声に耳を傾けるならば、彼我の同一視は性急に過ぎることになろう。国際交流員として山口県に在住のスペイン人女性が、日本の女性を語る。(23)

「女子高生にもビックリしています。皆が同じ制服を着て登校するという学校は、スペインにはほとんどありませんし、何よりあの短いスカートには驚きです。勉強するために学校に通っているとは思えません。そして、電車やバスの中で平気で化粧をする姿には、とても不快感を覚えます。恥ずかしいとか、周りの人たちに失礼という気持ちはないのでしょうか。」

以上、世間が変容した今、総じてこの国の〈社会〉の弱さが露呈されることになったと言えよう。翻って、しかし、小さくなくても世間は世間だ。問題の多いその性質は変わらない。外への排他性は上述の通りだが、内に向けては、メンバーへの同調圧力は強くなっても弱くなることはない。不祥事との関わりを〈失〉として咎める感覚も継続される。何か起これば、我々は先ずは世間に詫びを入れねばならないし、連帯責任の精神もこれまで通り遵守されねばならない。世間の代表を気取るメディアの傲慢さも弱まる気配はない。要するに、相変わらず摩擦・軋轢を増やす条件は堅固なままで、それを緩和するはずの民主主義や人権尊重の思想は弱いまま、ということだ。

③ ところで、既述の如く、「成熟社会」では未来も世の中も不透明になり、システムも複雑さを増して事の良し悪しや益不益が不分明になる。したがって、「仲間と同じであれば大丈夫、集団に属しているから安心」というわけにはいかなくなる。いわゆる企業リストラが象徴するように、もはや（会社）共同体への所属や共同体的作法の習得は、我々に何も保証しない。我々は否応なく〈自立した個〉の形成を目指さざるをえないだろう。〈自立した個〉とは、自分自身で選択・決定を下し、その結果については最後まで責任を負う人間のことだ。だが、世間中心にやってきた国、〈社会〉を鍛えてこなかった国における自己決定・選択は自己責任の部分がないがしろにしがちだ。そこでは、責任・義務を欠落させた自由・権利の主張ばかりが横行しよう。すなわち、単なる利己主義を求められている個人主義と勘違いする者が後を絶たず、その結果、エゴがぶつかり合い、この意味でも摩擦・軋轢は増すことになる。他方、世間中心の国では、まともな個人主義を目指せば目指したで、集団の和を乱した者として攻撃されるから、更に、摩擦は深まることになるのだ。

以上をまとめれば、小さく無関連になった世間は、社会道徳・常識を衰退させてこの国の日常生活を摩擦・軋轢に満ちたものにする。ところが、まさに世間の国であるがゆえに、我々の〈社会〉は弱く、軋轢を緩和するほどには人権思想や民主主義が育っていない。他方、世間の変容をもたらした「成熟社会」は同調圧力を脱した〈個〉の育成を要請するが、それに応えようとすると、世間の国であるがゆえに、エゴの衝突や異端排斥を呼ぶ。その結果、ますます摩擦・軋轢は深まることになり、日本を住みにくい国と化す。ちなみに、道徳の衰退を倫理の強化で抑制することも難しい。絶対神信仰を殆どもないこの国では、神の眼差し意識が各人の善行悪行を規制する、という意味での倫理は存在しないからだ。

#### (4)「学校危機」の由来——住みにくくなる日本(その2)

無論、「人々の衝突はいつの時代でもあるし、この国だけが特別ひどいわけでもない、内戦状態に陥っている国もあるし、米国をはじめ欧米先進国にも問題は多い」、との考え方もありえよう。だが、相対化に慰撫以上の意味はなく、それによって事態が変わるわけではない。とりわけ、子どもにとっては、「この国だけが特別ひどいわけでもない」との科白は慰撫にすらならない。なぜなら、大人と違って未だ自己形成を果たしていない子どもには、相対化自体が不可能だからだ。それだけではない。児童・生徒でもある子どもにとって、上の科白は殆ど信憑性をもたないからだ。現実を直視すれば、我々は「この国の学校のあり様だけが特別ひどいわけではない」などと言い切ることは到底できない。

その際強調すべきは、この「学校危機」もまた、世間の変容と同じく、そしてそれと絡み合いながら、「成熟社会」の到来がもたらしたものだ、ということだ。宮台が言うように、「現行の学校制度が『成熟社会』の到来を念頭に置いていないこと」が学校危機の根底にある。学校が置かれている「社会的文脈に敏感であることが大事」、が事の要諦だ。<sup>(24)</sup>世間同様、学校についてもかつての常識はもはや通用しない。これを以下、簡単に解説しておこう。

なぜ、この国の子どもはキレるのか、なぜ、陰湿ないじめをおこなうのか。それは、「成熟社会」では、学校的な環境そのものがストレス源になるからだ。この環境に適應できない子が不登校になり、適應に無理を重ねた子、いい子を演ずるのに疲れた子がキレる。ストレスをためた子がその解消策として、見えない所でいじめをする。いじめが学校での数少ない気晴らし・娯楽と化す。だとすれば、そもそも、なぜ、「成熟社会」では学校的な環境そのものがストレス源になるのだろうか。

既述の如く、「成熟社会」の到来の結果、あるいはそこに至る過程で、三つの現象が生じた。A. 家族・地域的世間(=家族・地域共同体)の空洞化、B. 未来・社会の不透明化、C. 学校的価値観の蔓延、がそれだ。ところが、BとCは矛盾せざるをえない。「我慢して勉強すればいい学校いい会社に入れて、いい人生がおくれる」、「真面目にコツコツやれば報われるはず」、「君の将来のために注意するのだ」等の親や教師からのメッセージは、未来・社会が透明であるという前提に支えられてこそ、子どもに届く。だが、高度経済成長期を終えバブル経済も崩壊した今、「輝かしき未来」はありえず、多様化する価値観の下、「隣りは何をやる人ぞ」と社会の不透明さも増した。にもかかわらず、現実味の薄い旧態依然たるメッセージが繰り返されれば、先のことより今ここを楽しみたいと感ずる子どもには、ストレスが蓄積されざるをえない。

また、Aであるのに、学校のあり方だけ共同体のままというのは殆ど不可能なことだ。親や子ども・教師の各世間が十分に重なり合い、学校が地域的世間に包み込まれていればこそ、これまでの学校の共同体的あり様は有効に機能しえた。かつては教室に同席する以前に地域の仲間であったから、容易にクラス仲間が成立した。が、地域的世間の解体が進む今はそうではない。ところが、教師は従来どおり、「クラス仲間なんだから仲良くしろ」といきなり言う。一般社会では、アカの他人と仲良くせよ、と命ぜられることはないにもかかわらず。家族でさえバラバラなのに、なぜ学校では、長い間、同じ人間と、同じ教室に居なければならぬのかも子どもにはわからない。塾や習い事では、自分で教師や教室を選べるにもかかわらず。今や、各世間は重ならず、同じような世間を生活している、との感覚も共有されないから、教師の「指導」も簡単には子どもの耳に届かない。「近所の

オジさんもそういうことを言ってたな」、「これだったら親父も殴るだろうな」というように一般化されず、聞き流すべき説教、理不尽な暴力と化す。

他方、Aであればこそ、最後の拠点を守らんとして、学校の共同体的あり様はむしろ強化されることにもなる。たとえば、小学校には、理想の人格イメージや期待される生徒像を投影したクラス目標を「上から」掲げ、一律強制的に到達させようとする教師がいる。しかも、連帯責任の手法を行使して。これは、クラスの足手まといにでもなればいじめの対象にされかねないから、一部の子どもには強烈なプレッシャーとなる。このクラスの一体化の上に、通常、子どもの与かり知らぬところで決められた細かな校則の遵守を軸とする学校共同体があり、中学校では、それへの順応ぶりが内申書でいちいち評価される。

また、Bの下では、子どもには、なぜ学校でだけ靴下がみな白でなければならぬのか全くわからないし、我慢して将来いいことがあるようには思えない。逆に教師の方は、社会が不透明化して、ますます子どもの内面をコントロールすることが難しくなるから、かえって、靴下の色やらスカートの丈やらのコントロール可能な外見、形の統一性にこだわることになる。細かな服装チェックが、きちんと管理しているとの安心感を教師に与え、うるさい地域へのエクスキューズにもなるからだ。こういうところでは、肝心の「君たちの将来のために」とか「服装の乱れは心の乱れの始まり」等のメッセージは、ウソっぽくてまず伝わらない。

むしろ、細かな服装チェック等を実質的に支えているのは、上からの同調圧力にともなって強化される子ども同士の横からの同調圧力だ。「みな我慢して従っているのに、オマエだけそこからはみ出すことは許さない」。一般に、共同体は、異端狩りの恐怖をもってメンバーを統合しようとする。共同体からの離脱が許されない時、人は同調圧力に従順になるしかない。更に、その共同体が動揺し曖昧模糊としている場合、事は深刻になる。同調すべき対象がメンバーには見えにくく、しばしば変動するからだ。この国の学校は、今、そのような共同体になっているのではないか。学校や教師に逆らい過ぎれば、「オマエだけ、はみ出している」、従順に過ぎれば、「内申書目あての行動ではないか」とクラス仲間からなじられ、あるいは、なじられるのではないかとビクビクする。その先にいじめが待っているともなれば、子どもは、自らの言動に慎重にならざるをえない。こうして、若者の「やさしさ」重視のコミュニケーションが形成されることになる。また、必死になって周囲の仲間の顔色をうかがわなければならない。小さな世間だけが自分を守ってくれるからだ。こうして子どもは、二重三重の同調圧力にさらされることになる。

そこに、鈍感な学校・教師が再びプレッシャーをかける。「いじめの傍観者になってはいけない」。窒息寸前になって帰宅すれば、BとCの矛盾に気づかぬ鈍感な親が子どもを待っている。子どもの学校への（外見上の）適応ぶりに安心した親から発せられるメッセージは、相変わらず、「いい学校、いい会社、いい人生」だ。そして、親から評価されるのは成績がよかった時のみ。現代日本の児童・生徒にかかるストレスは、猛烈という他はない。

#### （5）復古的、対症療法的打開策の無理

社会道徳・常識の不成立、および学校の危機的状況という事態を放置すべきではないとするならば、何らかの対処が考えられねばならない。その際に求められるのは、このような日本社会の根幹に関わる事態をもたらした要因を正確に把握し、抜本的立場から対処法



を構想することだろう。それはすなわち、「成熟社会」の到来を日本〈近代〉を二分する程の決定的事象として捉え、この大変貌の下では、この国のかつてのあり様は殆ど無効化する、との認識を根底に据えて考えるということだ。現実には、「成熟社会」の到来は、この国のあり様の核にあたる世間を小さく無関連なものへと変容させた。その延長線上に、社会道徳・常識の衰退はある。とすれば、対処法を構想するに際しては、世間中心の国のあり方それ自体を疑うところから出発する必要がある。学校危機についても、従来の学校の共同体的あり様そのものの是非を問う必要がある。マクロな視点に立って考えるならば、今や、我々は、〈世間〉依存体質を改め、この国の〈社会〉や〈個〉を徹底的に鍛えるべく方向転換すべきではないのか。学校は、社会性の形成や自己判断・自己決定能力の育成を教育の中心目標に据え、学校のあり様も、この目標に適合するものに変えるべきではないのか。

このように、筆者には、我々がとるべき方向は明らかだと思えるが、現実には推し進められている、推し進められようとしている対処法の多くは、個人的対処法であれ、上からの政策的な打開策であれ、相変わらず、世間中心の国たることを前提にしている。

前者の「個人的対処法」を解説すれば、それは、世間の変容や社会道徳の衰退など気にせず、状況に（巧みに）適応して世間の国を生き抜こうとするものだ。そのひとつの手立ては、宗教団体等の少し大きめの「内にやさしい」世間に所属することだろう。それによって人々は、相対的なものにせよ安寧を確保することができる。もうひとつの手立ては、対照的に、所属する小さな世間をたくさん作ってそれを適当に渡り歩くというものだ。「世間を広く」しながらも、各世間には「とりあえず」属することによって、同調圧力や摩擦を回避していく生き方でも言えようか。他に、第2節で触れた「ノイズ耐性」、すなわち、不快な事象をすべて雑音としてシャットアウトする感性・能力を強化する方法もあろう。

いずれにせよ、これらはみな、現状を容認し、その中での対応を個人的に工夫しようとするものだ。後者は違う。後者は、社会道徳の衰退という現状を打破しようとする。それは、上からの政策を伴う積極的対処法だ。但し、〈世間〉依存体質には全く手を付けない。では、それは具体的にはどのような内容をもつ打開策か。そこには限界や危険性はないのか。これらを明らかに（し受講生自身による考察の参考に供）することが、本稿（・本講義）最後の課題となる。

この、すでに實際上から推し進められてもいる打開策は、あくまでも世間中心の国であり続けることを軸に、その綻びを「復古」的、かつ対症療法的な方途で繕わんとするものだ。そこでは、基本的に「大きな世間」意識の復活が目指される。ナショナリズムの昂揚がその具体的中身だ。これに、道徳教育一般の強化でもって社会道徳の衰退に対処せん、対処しようとの志向が加わる。

「大きな世間」意識の復活とは、かつて共有された、「属する世間は違っていても、みな同じような世間を生きている」との感覚を再生して、小さく無関連になった世間の上に覆いかぶせようとするものだ。そのために、「同じ日本人ではないか」との意識の喚起が最重要視される。同じ日本人なのだからいがみ合わず和を大切にせよ、というわけだ。これが最重要視されるのは、世間の変容とそれによる摩擦増が、人々とくに為政者に国民統合の危機としても意識されるという事情があるからだ。人によってはこれを「公（共性）の喪失」として語る場合もあるが、そこでは、公イコール国家との理解が大半だ。グローバル化による外国資本の流入や、バブル崩壊による混乱・自信喪失という経済的事情もまた、

この国のナショナリズム強化の動きを加速する。

「同じ日本人ではないか」意識を広く喚起する一般的手段は教育だ。ここに、この打開策の具体的顕現として、愛国心の育成を核とする道徳教育の強化が登場することになる。だが、果たしてそれは有効な手立てとなりうるのだろうか。あわせて、それが為される主たる場・対象が学校・子どもとなることを想起する時、道徳教育の強化は、「学校危機」にも対応する、あたかも万能の処方箋の如き地位を占めかねないように思われる。実際、ことはそのように進んでもいる。だが、それは妥当なことなのだろうか。子どものストレスを低減することになるのだろうか。

筆者の立場はこれに否定的だ。世間の特質を踏まえれば、道徳教育単独での対処はまず無理だろうし、この打開策は、国家の全体主義化を承認する覚悟を人々に要求するだろう。どうということか。

道徳教育・愛国心教育を施される子どもの立場で考えてみよう。世間の国では、人々は、世間の眼差しを実際に感じなければ、世間の期待に応じた振る舞いはしない。子どもにとって、確かに学校は眼差しを感じべき強力な世間のひとつだが、あくまでひとつでしかない。学校世間が教える道徳は、その眼差しが届く範囲でしか通用せず、学校の外までをも拘束するものではない。実際、文部省が99年末におこなった国際比較調査の結果は、家庭が学校道徳教育の支えになりそうもない実情を如実に示す。調査は、日韓米英独の小五生、中学生を対象にしたものだ。2000年2月5日付けの朝日新聞は次のように伝える。

「子どもたちに親の様子をたずねたところ、『うそをつかないように』とよく諭す親は、父親が11%、母親で16%しかいなかった。3～5割程度いる他の国とは大きな開きがある。『弱い者いじめをしないように、とは全く言わない』という親は、父親76%、母親70%。『友だちと仲良くしなさい、とは全く言わない』という親も、父親81%、母親で70%に及ぶ。」

また、人は自らをとりまく環境総体から学習する。子どものまわりには、学校の内外に不道徳な振る舞いをする者が溢れている。たとえば、入学式や授業参観日に、教師の話を聞かずに私語をするのは彼らの親たちだ。愛国心や道徳教育を云々できるほど「偉い」はずの国会議員は、議院運営委員長から、「本会議や委員会での審議中、携帯電話の使用は禁止です。持ち込む時も呼び出し音を消すことになっています。」と注意される始末だ。<sup>(25)</sup> こういう状況の下では、道徳心の伝達はまず不可能だろう。素直に受け入れる子どもがバカをみるのが現状なのだ。それにもかかわらず、伝達が強行され、逸脱が許されないとすれば、子どもは教師の前で偽善を演ずるしかなく、ストレスの蓄積は容易となろう。

道徳教育の強化だけでは難しいとなると、それを補おうと第二の手立てが登場する。それが厳罰主義の導入・拡大だ。罰金・罰則等の法的措置によって社会的摩擦減を図らんとする動きが強化される。そこから、肝心の子どもが教化されえないのなら、子どもを大人並みに扱い、法的措置にさらそう、との議論が生じることになる。少年法を改正せよ、とはそのようなものだろう。

更に、不道徳な大人・環境から子ども・若者を一定期間隔離して、その下で道徳教化を図れば成功する、との意見も強くなる。これが、第三の手立てとしての軍隊教育的なもの、直裁に言えば徴兵制の導入だ。これなら学校共同体の存続・強化とも矛盾せず、愛国心育成にも大いに与かることになる。作家の曾野綾子が、「シンガポールの『兵隊さん』」と題する文章で、これを代弁している。<sup>(26)</sup>

「軍隊での訓練で、ほとんどの子供は、見違えるような大人になると言う。兵士というものは人を殺すだけが目的ではなく、同胞を守るものだということを知るのだ。高齢者をいたわったり、婦人や子供の命を救うことに働くことも覚える。サバイバルの技術もしっかり身につけてたくましい人間になる。・・・軍隊が学校の教師がなし得ない部分の教育を受け持つ。悪くはないシステムである。」

公共心を高めるためのボランティア活動の義務化を主張する政治家等が、しばしば、自衛隊で訓練を受けることもそこに含まれていい、と付け加えるのは上のような理由によるものだ。もっとも、彼らは誰一人として、自分たち（大人）からこれを始める、とは言わない。ボランティア活動も、道徳教育も、軍隊教育も、恣意的な「長幼の序」をもって、常に上から子どもに押しつけるのが世間の国だ。

但し、軍隊教育の制度化は容易ではない。そこで、愛国心教育が制度化の促進剤として、また、官製道徳を強制する手段として一層強化されることになろう。上からの施策に従わぬ者はみな「非国民」として位置づけられ、彼らの存在が道徳心の伝達を妨げているかの如く、彼らを排除すればすべてがうまくいくかの如く喧伝されるのではないか。

結局、世間の保守を軸とする打開策は、以上のような三点セットの形成を不可欠とするように筆者には思われる。そのように拡張せざるをえないのは、元々、出発点に無理があるからに他ならない。この打開策の筋書きは、愛国心教育等を通じて「同じ日本人ではないか」意識が植え付けられれば、「属する世間は違っていても、みな同じような世間を生きている」との感覚、すなわち「大きな世間」感覚が再生され、人々の摩擦は軽減する、というものだ。だが、これは殆ど現実無視の空論に近いものと言わざるをえない。

そもそも、かつて「同じような世間を生きている」との感覚を人々が共有できたのは、人々が属する世間が、実際に十分重なり合い、人々の基本的価値観も同じだったからだ。それゆえに、世間ごとの道徳の内容も広範囲の一致を見、社会道徳となった。つまり、人々がかつて「大きな世間」の感覚を持ち、それを「同じ日本人ではないか」との言葉で表現できたのは、その前提に、「大きな世間」と見なしうる、各世間の十分な連関が現実に存在していたからなのだ。したがって、この前提がないところで、人々を「同じ日本人ではないか」と教化し、その結果人々が愛国者になったとしても、それだけのことでしかない。愛国者個々人が属する世間は、相変わらず小さく無関連なままだ。「同じような世間を生きている」との感覚は醸成されないだろう。

#### （6）「無理」強行の行方——結びにかえて

にもかかわらず、この方策が強行され続けた場合、どういう事態が生ずるか。大いに予想されるのは、教化が進められる「同じ日本人ではないか」意識に、現実の世間の方を合わせよ、との議論の登場だ。すなわち、「大きな世間」感覚をナショナリズムに固定し、かつそれを前提にして、それと適合するような「大きな世間」を作る、つまり、日本全体をひとつの世間にしてしまう。これは要するに、国家の全体主義化の主張に他ならない。筆者には、あくまで世間中心の国であり続けんと欲するのであれば、このような戦前・戦中への復古を是とする覚悟もまた必要かと思われる。

無論、全体主義化は容易には成就しない。力による解決がなされない限り、軍隊教育の制度化を図らんとする場合と同様の事態が招来しよう。そこでは、手段としての愛国心教育が殆ど自己目的化し、これを受け入れようとすれば、人々は、異端（＝非国民）視され

ぬよう自らの言動にひたすら慎重であらねばならなくなる。そのストレスは強烈だ。だが、その際、頼るべき各人の世間はあくまでも小さく、安全確実な同調先を見い出そうとすれば、結局頼りになるのはおのれ自身の才覚ということになる。他方、愛国心教育の過度の強制は少なからぬ抵抗を呼び起こし、人々を確実に混乱に陥らせる。混乱を生き抜こうとすれば、ここでも頼りになるのは自らの判断力・決断力だ。詰まるところ<自立した個>の育成が要請されるのであれば、ストレートにそれを目指すべきで、世間の保守などという時代逆行的なまわり道をとるべきではないだろう。模索すべきは、<自立した個>に<社会性>を付与するための手立てではないか。

これが回避され続ける時、この国の将来には遠からず、ポピュリズム(=大衆迎合主義)の横行という事態が予想されうる。閉却すべからざるは、誤った打開策の強行のために一向に進捗をみない状況に倦む人々が、おそらく大量に出現することだ。すでに、対症療法の強硬な主張者にはその兆候が濃厚だとも言えるが、これらの人々が増えれば増えるほど、既成の政治システムや為政者は無能視され、全体の議論は加速度的に性急かつ短絡的情緒的になろう。関心は現状打開それ自体となり、その方向性や内容の吟味には置かれなから、状況に倦む人々の要求は、決断と実行およびそれを為しうる人物に焦点化しよう。打開に有効となれば、異端狩りやスケープゴート探しに邁進することにもなろう。ここまでくれば、ポピュリスト政治家の台頭は容易だ。

他方、状況に倦む人々のすべてがポピュリズムの支持者になるわけでは勿論ない。問題は、その一部から、あるいは、それ以前の愛国心教育の強行の時点で同調先を見い出しえなかつた人々の中から、あるいは、すでに世間の変容の段階で孤立してしまった人々の中から、一般世間への所属を拒絶し、反社会的行為も辞さない者が形成されうることだ。この国では、それは90年代に経験済みのことでもある。それが拡大反復される可能性を是とする覚悟もまた、<社会性>を培おうとしない我々には必要となるだろう。

## 注

- (1) 阿部謹也『西洋中世の愛と人格』朝日新聞社 1992, 156頁、157-184頁。また、『平凡社大百科事典』第7巻 1985, <神判>の項(1035頁)も参照。
- (2) 阿部前掲書、147頁。
- (3) 『毎日新聞』 94年3月30日
- (4) 『朝日新聞』 98年10月3日(天声人語)
- (5) 同、99年1月19日
- (6) 阿部謹也『ヨーロッパを読む』石風社 1995, 415頁。
- (7) 加藤典洋『日本の無思想』平凡社新書 1999, 28-37頁。
- (8) 笠間達男「ああ! 甲子園野球」(柿沼・永野編『学校という<病い>』批評社 1997所収)、217頁。
- (9) 『東京スポーツ』91年8月24日(『たけしの「号外」』洋泉社 1998所収)
- (10) 柿沼昌芳「甲子園野球が創り出す学校体質」(柿沼・永野前掲書所収)、152頁。
- (11) 『東京スポーツ』91年11月22日
- (12) 『毎日新聞』98年6月19日
- (13) そのひとつの典型例が、朝日新聞によるサッカー選手中田英寿へのインタビュー記事だ。「君が代」に関する発言を掲載されることによって、中田はボディガードを

- 必要とするに至る。(小松成美『中田英寿 鼓動』幻冬社 1999, 232頁以下参照)
- (14) 灰谷健次郎との対談「少年Aとメディア」(『論座』97年11月号所収)、75頁。
  - (15) 堤清二・橋爪大三郎編『選択・責任・連帯の教育改革』勁草書房 1999, 176頁。
  - (16) 同、177頁。
  - (17) 阿部『ヨーロッパを読む』410-411頁。同『西洋中世の愛と人格』135-136頁。
  - (18) 宮台真司『世紀末の作法』メディアファクトリー 1997, 189頁。
  - (19) 『読売新聞』97年1月3日(精神科医の大平健が伝える一女性の言葉)
  - (20) 宮台真司『制服少女たちの選択』講談社 1994、同『まぼろしの郊外』朝日新聞社 1997、同『これが答えだ!』飛鳥新社 1998他。
  - (21) 同『世紀末の作法』135頁。
  - (22) 『朝日新聞』98年8月13日(夕刊)
  - (23) 『サンデー山口』99年10月8日(「世界の目、山口見たまま聞いたまま」82)
  - (24) 尾木直樹・宮台真司『学校を救済せよ』学陽書房 1998, 3頁。宮台真司『透明な存在の不透明な悪意』春秋社 1997, 31頁。本節の叙述は、以下のものを含め、基本的にこれらの宮台の所論に依拠している。宮台・藤井誠二『学校的日常を生きぬけ』教育史料出版会 1998。
  - (25) 『朝日新聞』2000年3月31日
  - (26) 『毎日新聞』99年6月20日(「時代の風」)